

## 大島高校体育祭応援団について

大島高校体育科  
教諭 美坂健太郎  
教諭 山田摩理子

はじめに

「平成最後」というフレーズを幾度となく耳にした平成30年から平成31年。平成31年4月30日をもって平成が終了する。毎年9月に開催されている体育祭も今年度は「平成最後」の体育祭となった。大島高校の体育祭と言えどと人に尋ねると多くの人が「応援団だよ」と答えるように、大島高校体育祭の一つの目玉は地区対抗の応援合戦だ。どの地区も最優秀賞を獲得するために夏休みに全力で練習してその成果を披露する。

「平成最後」と言うことで、ふと今までの歴代の最優秀地区はどの地区なのかという話題になった。過去の資料をいろいろと調べたがまとめた資料がないことに気がついた。そこで「平成最後」の一区切りに可能な限り歴代の応援団優勝地区を調べ資料として残しておく必要があると考えこのまとめを思い立った。山田摩理子教諭と共同で資料集めやヒアリングを計画しまとめた。応援団優勝カップに残っている各地区応援団の地区名やそれ以前の分に関しては卒業アルバム精査や、同窓会名簿を参考にめぼしき人に直接ヒアリングを実施した。

### 創立100周年記念誌から

#### 体育祭

現在の体育祭は、幾分応援にウェイトがかかっている感じがしないでもないが、秩序整然としており、またどの種目についても全員が全力を出し切ってプレイする姿は気持ちが良い。観客もそのことに賛辞を送るわけで、私が在学の当時、昭和25年から始められた地区別対抗の体育祭は、上級生の指導のもと、大高健二が安陵山麓に青春のエネルギーを昇華させる伝統的学校行事になっている。以前は時間を余り気にしない時代であったことから、レクリエーション的種目も多く、3年生の仮装行列は圧巻であった。しかし仮装行列も、学校行事としての性格上、時間的な制約も考えねばならず、縮小した形の着せ替え競争に変わったが、現在はこれも無くなった。部紹介も取り入れられたことがあったが、これも着替えや準備に時間がかかることから消滅した。

一方、花の応援団は昭和39年頃まではさほど統一、整然としたものでもなかったが、昭和40年から応援を盛り上げようということで、応援だけ特別の採点種目として以来、懸命にやりだし、現在のようになった。応援の服装も祭りのはっぴを着たり、突飛な服装をすることもあったが、次第に淘汰・洗練されていった。また、人数についても話し合わ

れるうちに現在の人数に落ち着いた。入場行進・閉会式に応援団は参加しなかった時期もあったが、体育祭は応援大会でなく、応援はあくまでも体育祭に花を添える脇役に徹するべきであるということで、全員正規の体育服で参加し、閉会式だけは、時間の都合で、応援団の服装で参加ということになった。中南部が、一大勢力を誇っていたこともあった。以前は、笠利、龍郷、三方、郡外、伊津部、中南、離島郡外の七地区対抗で競技していたが、過疎化が進み、笠利と龍郷とが合併して笠龍地区とせざるを得なくなり現在の6地区となった。

仮装行列や、着せ替え競争、部活発表がなくなる中で、3年の団体種目として登場したのが、フォークダンスである。フォークダンスは、当事者がやってみるべきものであり、公衆の面前で、しかも体育祭でやるべきものではないなど、今では考えられない議論の末、昭和46年から体育祭のプログラムに載せられるようになった。

昭和36年までは10月の第1日曜が体育祭であったがその後、少しずつ前に引き寄せられて、昭和41年から、9月23日秋分の日が、大島高校体育祭の日として定着した。丁度この頃は、秋雨前線が奄美諸島にかかりやすく、台風などの影響と相まって、大島の体育祭は雨天が多かった。しかし、少々の雨でも体育祭は決行されることが有名であり、昭和38年以降延期になったのは、ただの1回だけであった。

また、90%は何らかの形で、上級学校へ進学する本校においては、受験を控える3年生を早く落ち着いた雰囲気させ、受験へ集中させたい理由から、平成元年から第二日曜日に実施することになった。平成4年からは学校週5日制の導入で、第2土曜日とのからみや、2学期9月になってから準備期間が非常に短くなる年があることから、9月15日敬老の日を体育祭として定着されるようになった。

さらに、4階特別教棟の着工した昭和51年までは、下部校庭で実施してきたが、工事の資材置き場の関係もあって、全く使用不能となり、昭和51年から創立70周年記念事業で完成していた上部校庭での実施となり、さらに、翌昭和53年には体育館が竣工し、下部校庭はいよいよ手狭になり、以後、体育祭は上部校庭で実施されている。

藤山萬太「安陵」第9号

昭和25年から現在の地区対抗での体育祭が実施されている。現在の地区割りでは上方、下古、伊津部、笠龍、中南、金久の6地区で競技しているが、地区対抗で競技が始まってから平成30年までの70年間の間に、地区割りの変遷があったことが伺える。また昭和40年から応援団の部を採点種目としたあたりから、地区対抗応援団の意識が高まり、現在の応援スタイルにつながっていることがわかる。応援団の統制を取ることに、大変な苦労があったことが想像され、現在までつながっている伝統に驚きを隠せない。

現在の各地区の応援団について

## 伊津部地区（団カラー：青）



平成30年度「平成最後」の最優秀賞

名瀬中学校校区および離島の寮生で編成された伊津部地区。以前は生徒数も多く団編成も困ることはなかったが、最近の生徒減で団員確保に苦労していた。しかし少ない人数ながらも伝統の「えっさっさ」で気合いの入った演舞を見せる。優勝回数4回と優勝回数は歴代3位タイなのだが、昭和の最後平成63年度の体育祭も優勝で締めくくり、平成最後の体育祭も優勝で締めくくるといふ、狙っても出来ないような歴史的、運命的な快挙を達成している地区である。今度は締めではなくスタートの優勝を2連覇という形で獲得できるか注目される。

## 上方地区（団カラー：オレンジ）



もともと三方地区として編成されていたが、下方地区の人口増加に伴い、上古地区に再編成。しかし今度は上方地区の人口増加および下方地区の人口減に伴い、上方地区と単独の地区編成となった。創立100周年に考案された大熊の鰹の一本釣りをモチーフにした「鰹節」がシンボリックな演技である。意外なことに優勝は一度もしたことがない。「無冠の帝王」と揶揄されることもしばしばだが、決してレベルが低いわけでない。新元号での祈念すべき第一回の体育祭にでっかい鰹を釣り上げることができるか注目したい。

## 金久地区（団カラー：黄）



金久中出身者と金久中校区に住所がある生徒で編成している。扇を使った「ひまわり」が伝統演舞として引き継がれている。金久地区は上方地区に次いで人数の多い地区であるが、応援団に積極的に参加する生徒が少ないのが昔からの悩みの種である。優勝回数は5回と中南地区の次点であるが、中南優勝19回に大きく水を空けられている状態は否めない。最近の優勝は平成22年度が最後なので、新元号になるチャンスに大輪のひまわりを咲かすことが出来ることを期待したい。

## 下古地区（団カラー：紫）



上方が単独になる以前は下方（小宿中校区）単独編成であったが、現在は下古地区として小宿・大川・崎原の出身者で構成されている。それぞれの校区が離れて存在するので練習に苦勞するが三方地区から引き継ぐ「疾風迅雷扇の舞」は息の揃った美しい演舞が特徴である。優勝回数4回だが、下古地区に再編されてからの優勝は未だ勝ち取っていない。いつも惜しい位置つけているので、平成21年度以来の優勝も夢ではない。

## 笠龍地区（団カラー：緑）



昭和25年当初は笠利地区と龍郷地区に分かれていたが、人口減少に伴い二地区が併合して「笠龍」地区となった。縦の線を意識した「笠龍 龍の舞」が特徴で扇を用いながら、一糸乱れぬ連携の取れた演舞構成を持ち味としている。優勝回数は2回と思っているよりも少ないが、平成29年度には4年ぶりの優勝を果たしている。団結力で新元号一回目の優勝も不可能ではない。

## 中南地区（団カラー：白）



瀬戸内・大和・住用・宇検の各中学校で編成されている。ほとんどの生徒が寮生というのも特徴である。資料を見ると過去には「中南部」と表記されているが、最近では「中南」と呼ぶことが定着している。演舞の最後を飾るのが扇の舞である。団長が口上を述べながら密集隊形で織りなす扇の動きは魅了される。歴代優勝回数19回を誇る大高屈指の最強応援団である。ここ2年間優勝から遠ざかっているが中南復活の日は近い。



## 大島高校応援団 歴代優勝地区

西暦	年度	卒業年	卒業回	優勝地区	西暦	年度	卒業年	卒業回	優勝地区
1983	昭和58年度	59	35	中南	2001	平成13年度	14	53	中南
1984	昭和59年度	60	36	中南	2002	平成14年度	15	54	下方
1985	昭和60年度	61	37	中南	2003	平成15年度	16	55	金久
1986	昭和61年度	62	38	中南	2004	平成16年度	17	56	下方
1987	昭和62年度	63	39	中南	2005	平成17年度	18	57	下方
1988	昭和63年度	64(H1)	40	伊津部	2006	平成18年度	19	58	中南
1989	平成元年度	2	41	金久	2007	平成19年度	20	59	中南
1990	平成2年度	3	42	金久	2008	平成20年度	21	60	中南
1991	平成3年度	4	43	伊津部	2009	平成21年度	22	61	下方
1992	平成4年度	5	44		2010	平成22年度	23	62	金久
1993	平成5年度	6	45	中南	2011	平成23年度	24	63	中南
1994	平成6年度	7	46	伊津部	2012	平成24年度	25	64	中南
1995	平成7年度	8	47	中南	2013	平成25年度	26	65	笠龍
1996	平成8年度	9	48	離郡	2014	平成26年度	27	66	中南
1997	平成9年度	10	49	金久	2015	平成27年度	28	67	中南
1998	平成10年度	11	50	中南	2016	平成28年度	29	68	中南
1999	平成11年度	12	51	中南	2017	平成29年度	30	69	笠龍
2000	平成12年度	13	52	中南	2018	平成30年度	31	70	伊津部

平成だけを調査する予定だったが、様々な情報提供をいただき昭和58年度の第35回卒まで遡り36回分の優勝（最優秀賞）地区の調査ができた。現時点で平成4年度第44回卒の優勝地区を断定することが出来ていないので、更に調査を進めていきたい。

各地区の優勝回数（昭和58年度以降から平成30年度まで）

中南地区 19回

金久地区 5回

伊津部地区 4回

下方地区 4回

笠龍地区 2回

上方地区 0回

離郡地区 1回（現在離郡はない）